



夏に流行のピークが。感染経路はプール以外にも

プール熱入らなくても感染

プール熱は、咽頭結膜熱とも言い、人にうつる恐れのある感染症だ。7～9月にかけて流行する夏風邪の代表で、小さな子どもがかかりやすい。北浜ごどもクリニック（川崎市）の北浜直院長は、「梅雨が明ける頃から患者が急増する。登校・登園には小児科医の許可が必要」と話す。

2～3歳の子どもはウイルスに対する免疫が十分でなく、感染しやすい。大人は子どもに比べて免疫力があるため、たとえかかっていても軽い症状で済むことが多いという。

梅雨明けから急増 2～3歳注意

夏に流行のピークが。感染経路はプール以外にも
プールに入る時期に流行が重なるため、プールでうつると思われがちだが、感染経路は必ずしもプールとは限らない。「手足口病や他の風邪と同様、せきやくしゃみなどで飛沫感染する。感染力が強いウイルスなので、プールに入らなくても保育園など集団生活の場でうつりやすい」と北浜院長は説明する。

ウイルス感染のため、特別な治療法はなく、対症療法が中心となる。喉の痛みが強い場合は、喉越しのいいメニューにして食べやすくするなど工夫をするという。

文部科学省では、症状が治まってから2日間以上登校・登園を禁止するよう定めている。学校や保育園、幼稚園への出席には、小児科医による治療証明が必要だ。北浜院長によると、登校・登園ができるようになれば、プールに入っても問題ないという。

うがいと手洗いが対策の基本だ。「インフルエンザなどが流行する冬場は、うがいと手洗いを入念にするが、夏場はどうしてもおろそかになりがち。夏でもしっかりとうがいと手洗いをすることが、感染予防につながる」と北浜院長。さらに、夏バテで体力が低下するとウイルスに感染しやすくなるため、「しっかりと栄養を取り、エアコンの当たり過ぎに注意することも大切」とアドバイスしている。

（メディアカルトリビューン＝時事）

2016年7月3日 朝刊

①プール熱は、どんな症状が表れますか。

②どんな場面で、感染しますか。

③どんな対策がありますか。

年 組 名前

（小学校 学級活動・保健、保護者・教員）